

論文

『バガヴァッド・ギーター』の倫理思想
—「厭離 (saṃnyāsa)」 「放棄 (tyāga)」 の検討を中心に—

福田槇子¹

On the Ethics in the Bhagavad-Gītā —focusing on the examples
of “saṃnyāsa” and “tyāga”—

Makiko FUKUDA¹

ABSTRACT

Three ethical principles are found in the Mahābhārata, an epic Sanskrit poem from India. The first is the act of affirmation and the second is the act of denial. The third principle retains the characteristics of the preceding two in that the act of denial is kept in mind when executing an act. The third principle is found in the Bhagavad-Gītā, the 6th volume of the Mahābhārata. In this paper, examples of the usage of the words “saṃnyāsa” (renunciation) and “tyāga” (abandonment) which represent the spirit of the act of denial were investigated by using an index and collecting them from the text. In conducting this study, those examples were classified by cross-referencing the main viewpoints which distinguish those ethical principles to the contents of the act, how to act, and the state reached by the act. Renunciation and abandonment are related to how one acts. Concerning how to act, the objective and the way of renunciation and abandonment are important. The objects of renunciation are “karman” (act) and “saṃkalpa” (will) and the objects of abandonment are “saṅga” (adherence), “karma-phala” (result of the act), “kāma” (desire), “krodha” (anger), “lobha” (covetousness), and others. These objects are the effects resulting from the three guṇas (sattva, tamas, and in particular, rajas) that constitute the prakṛti, the origin of all material things in the universe. The act also results from the guṇas of prakṛti. Therefore, the way of renunciation and abandonment of the effects from these guṇas is called the way of Yoga. It is reasoned that the state attained by taking action can be explained as, “The act is not done even if one does the act.” This kind of mental detachment enables one to avoid karma even while continuing to physically act. This is because the state is separate from the effect of guṇas.

キーワード バガヴァッド・ギーター, マハーバーラタ, 倫理, 厭離, 放棄

Keywords: Bhagavad-Gītā, Mahābhārata, ethics, saṃnyāsa, tyāga

1. 問題の所在

実践を重んじるインド思想においては、その実践によってどのような境地に到達するのかが、その重要性を知るための観点となる。『マハーバーラタ』第6巻所収の『バガヴァッド・ギーター (Bhagavad-Gītā)』 (以下、BhGと呼ぶ) では、この到達する境地について、

すべてにわたって執著することのない知性 (buddhi) を持ち、アートマン (自己) を克服し、渴望を離れた者は、厭離によって、行為の離脱 (naiṣkarmya) という最高の完成に到達する。(18.49)

なぜならば、知は修習 (abhyāsāt) より優れ、静慮

(dhyāna 禅定) は知より優れ、行為の果報の放棄は、静慮 [より優れ]、放棄より直ちに寂静 [が生じる] からである。(12.12)

とあるように、「最高の完成」(18.49)、「寂静」(12.12)への到達が示されていることから、厭離および放棄が重要であることがわかる。

また、叙事詩『マハーバーラタ』の哲学編に表れる倫理説には、行為を肯定し、その実行を求める行為肯定の立場 (pravṛtti) と、行為を否定し、放棄しようとする行為否定の立場 (nivṛtti) という二つの立場、およびこれら二つの立場の特徴を持つ第三の立場が見出される (cf. 金倉1976 : 70

¹ 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学大学院国際文化研究科

Graduate School of Intercultural Studies, The International University of Kagoshima, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan

2013年6月10日受付, 2013年7月3日採録

ー92)。第三の立場とは、行為否定の立場の精神に立脚して、行為を実行する立場である。そしてこの第三の立場を明示するのが、ここに取り挙げるBhGである。BhGと同じく『マハーバーラタ』哲学編に数えられる第12巻「解脱法」における行為否定の立場は、中村(1993)で「nivr̥tti」「tyāga」「nirveda」の語の検討において取り挙げられている。本稿は、行為否定の立場を明示する「放棄(tyāga)」の語、およびこの語と揃ってBhGで関説される「厭離(saṃnyāsa)」の語の用例をBhG全体から集め、その全容を明らかにしようとするものである。

考察方法としては、検討材料(検討する言葉の用例)を項目ごとに分類し、検討していく方法を用いる。具体的には、検討材料の客観的な証拠提示のために索引による該当箇所を示す。使用する索引は中村(1999a; 1999b; 2000)である。論述の根拠となる語(本稿では放棄と厭離の語)には、【 】を付し、索引において見出し得る限りの、語の用例に関する偶番号を【 】に入れて註に置いた。索引により、論拠となる材料を委細漏らさず確保することで、用例の全体像を把握し、関係する用例のごく一部から結論を導き出す誤謬を避けることができると考えられる。特に、テキスト内に検討材料が広く散在するBhGをはじめとする先古典期の思想の考察を行う場合、この方法により綿密な考察が可能となるだろう。

BhGにおける厭離を単独に扱った先行研究として、上村(1991)、菊池(2006)がある。菊池はBhGに先行する厭離の用法を調べ、行為を放棄することに用いられていた厭離の語が、行為を肯定するBhGにおいては否定的に扱われ、さらにバクティ思想への発展を示しているとする。上村は、厭離の語を「放擲」と訳し、この語をBhGにおける「最も重要なキーワードである」(上村(訳)1992: 226)と述べている。また、赤松はガンディーも厭離の重要性を指摘しているとし、厭離の用例を引用して、厭離を実践的に捉えたガンディーの解釈を挙げている(赤松2008: 165–176)。

放棄については、単独で扱われたものは管見の及ぶところ見当たらないが、厭離の用例と混淆して取り扱われている例がある(e.g.上村1991)。本稿では厭離と放棄をそれぞれ独立した形で検討する。

以上、既存の研究では、『マハーバーラタ』の倫理の立場を前提とした検討はなされておらず、また、索引を基礎とする厭離と放棄の語の全用例の検討も未だなされていない。ここに本稿の意義があると考えられる。

以下、【厭離¹⁾】とその関係語および【放棄²⁾】とその関係

語が使用される用例を検討する。テキストは、キンジャワデカル校訂本を用い、訳は拙訳を用いる。³⁾

2. 厭離と放棄

厭離と放棄について次のように説かれている。

arjuna uvāca |

saṃnyāsasya mahābāho tattvam icchāmi veditum |
tyāgasya ca hṛṣikeśa pr̥thak keśinīśūdana || (18.1)

アルジュナは言った。

長き腕の方よ、私は厭離(saṃnyāsa)と放棄(tyāga)⁴⁾の真義を、髪の逆立った方よ、それぞれ知ることを望む。ケーシン鬼の討伐者よ。

śribhagavān uvāca |

kāmyānām karmaṇām nyāsaṃ saṃnyāsaṃ kavayo viduḥ |
sarva-karma-phala-tyāgaṃ prāhuḥ tyāgaṃ vicakṣaṇāḥ || (18.2)

聖なる至尊は言った。

詩仙(kavi)たちは、欲望に基づく行為の除去を厭離と理解し、知者(vicakṣaṇa)たちは、一切の行為の果報を放棄することを放棄と説く。

このように、厭離とは「欲望に基づく行為の除去」(18.2)であり、放棄とは「一切の行為の果報を放棄すること」(18.2)と説かれている。また、いずれも行為に関係していることがわかる。辻(1982)は、18.2の補注に「遠離と捨離(本稿では、厭離と放棄)とを別々に定義すれど、以下概して捨離なる語を用い、両者に厳格な区別を設けず」と記しているが、BhG全般においてはどうか。以下、厭離と放棄の用例をそれぞれ個別に検討する。なお、BhGは、アルジュナとクリシュナとの対話によって成り立つ宗教詩である。BhGにおいてクリシュナは、「Bhagavat(至尊⁵⁾)」あるいはクリシュナが自身を指すときは「われ」と1人称で表れている。

3. 厭離について

厭離の用例は、ヨーガとの関係において説かれるものと、至尊との関係において説かれるものとに大別することができる。そして、これらは「行為」と「意欲」を厭離する方法ともなっている。以下、まず厭離とヨーガについて説く用例を挙げ、次に「厭離の方法」によって用例を分類し、「厭

離の対象」と、その「厭離によって到達する境地」とは何かを検討する。

3.1. 厭離とヨーガ

厭離とヨーガとの関係については次のように説かれている。

saṁnyāśas tu mahābāho duḥkham āptum ayogataḥ |
yoga-yukto munir brahma na-cireṇādhigacchati ||
(5.6)

しかし、長き腕の者よ、厭離はヨーガなくして得ることとは困難である。ヨーガによって心統一した牟尼は、
久しからずしてブラフマンに到達する。

yaṁ saṁnyāsam iti prāhur yogaṁ taṁ viddhi pāṇḍ
ava |
na hy asaṁnyasta-saṅkalpo yogī bhavati kaścana ||
(6.2)

厭離 (saṁnyāsa) と呼ばれるもの、それをヨーガと知るべし、パーンドウの子よ。なぜならば、意欲 (saṅkalpa) を厭離しない者は、どの人もヨーガ行者となることはないからである。

yadā hi nendriyārtheṣu na karmasv anuṣajjate |
sarva-saṅkalpa-saṁnyāsī yogārūḍhas tadocyate ||
(6.4)

なぜならば、一切の意欲を厭離した者 (saṁnyāsin) が、
感官の対象にも行為にも執著せざるとき、そのとき彼は
ヨーガに登った者と言われるからである。

6.2で厭離とヨーガとは同一のもののように説かれているが、以下では両者を対比して次のように説いている。

arjuna uvāca |

saṁnyāsaṁ karmaṇāṁ kṛṣṇa punar yogaṁ ca śaṁ
sasi |
yac chreya etayor ekaṁ tan me brūhi suniścitam ||
(5.1)

アルジュナは言った。

クリシュナよ、[あなたは] 行為の厭離を [讃え]、さら
にまたヨーガを讃える。両者の中で、より優れた一
つのもの、それを私に確実に説き給え。

śrībhagavān uvaca |

saṁnyāsaḥ karma-yogaś ca niḥśreyasa-karāv ubh
au |
tayos tu karma-saṁnyāsāt karma-yogo viśiṣyate ||
(5.2)

聖なる至尊は言った。

厭離 (saṁnyāsa ; 行為を捨てること、N註) とカルマ・
ヨーガ (行為の実践による心統一) との両者は、至善を
もたらす。しかし、それらの中で、カルマ・ヨーガは、
行為の厭離より優れている。

このように、厭離とは、「ヨーガなくして得ることは困難」 (5.6) なものとされ、「厭離 (saṁnyāsa) と呼ばれるもの、
それをヨーガと知るべし」 (6.2) とあるように、ヨーガと
は厭離であるとも定義されている⁶⁾。

6.2においては、厭離とはヨーガであると両者が同一の
ように説かれているが、5.1では、「行為の厭離」は「ヨーガ」
と、5.2では「厭離」は「カルマ・ヨーガ」と対比される
形で表れている。ヨーガはサーンキヤとともに閑説される
例 (2.39, 3.3)⁷⁾ が見出されるが、ここでは厭離の語がヨーガ
(カルマ・ヨーガ) と対比されるサーンキヤの言い換えの言
葉として用いられているようである。厭離 (saṁnyāsa) の
語は、「一切の物質原理からの完全な捨離を要求する」 (中
村1982 : 154) というサーンキヤ説の特徴を明示している
と考えられる。またそれは「カルマ・ヨーガ」と同じく「至
善をもたらす」ものであるが、BhGでは「カルマ・ヨーガ
は、行為の厭離より優れている」 (5.2) とあるように行為
の実行の方を重んじている。

そして、5.6, 6.2, 6.4の用例から、厭離は行為否定の立
場の行為つまりヨーガ (心統一) と密接に関係していること
がわかる⁸⁾。また、厭離が行為否定の立場にあるということ
は、厭離が「行為」を厭離 (5.1~2) するものとして説かれ
ていることからわかるだろう。

なお、BhGにおける「karman (行為)」に関する用例の
検討の結果、導き出した「行為肯定の立場」「行為否定の
立場」「第三の立場」を識別する視点は、行為の内容、行
為の在り方、行為によって到達する境地の三点である。行
為否定の立場と第三の立場は、行為内容に違いがあるが、
行為の在り方と行為によって到達する境地は共通する。次
に列挙する用例をこの視点をもとに検討する。

3.1.1. 厭離の対象、厭離の方法、厭離によって到達する境地

以下の用例に表れている通り、行為否定の立場における
行為内容とはヨーガである。では、行為の在り方において
は何をどのように厭離するのか、つまり厭離すべき対象と
厭離の方法とは何かが問題となるだろう。また、厭離によ
って到達する境地についてはどのように説かれているだろう

か。

厭離の方法にヨーガが次のように用いられている。

yoga-saṁnyasta-karmāṇaṁ jñāna-saṁchinna-saṁśa
yam |
ātma-vantaṁ na karmāṇi nibadhnanti dhanaṇja
ya || (4.41)

ヨーガによって行為を厭離した者、知によって疑惑を
断除した者、アートマン(自己)を制する者を行為は束
縛しない、富を得る者よ。

sarva-karmāṇi manasā saṁnyasyāste sukhaṁ vaśi |
nava-dvāre pure dehī naiva kurvan na kārayan ||
(5.13)

個我(dehin)は、意(manasa)によって一切の行為を厭
離して、九門の都城(=肉体)に支配者として安らかに
住する。実に「自ら」行わず、「他に」行わせること
なく。

厭離によって「行為の離脱という最高の完成に到達する」
という。

asaṁkta-buddhiḥ sarvatra jīṭātmā vigata-sprhaḥ |
naiṣkarmya-siddhiṁ paramāṁ saṁnyāsenādhigacch
ati || (18.49)

すべてにわたって執著することのない知性(buddhi)
を持ち、アートマン(自己)を克服し、渴望を離れた者
は、厭離によって、行為の離脱(naiṣkarmya)という
最高の完成に到達する。

しかし、次のようにも説かれている。

na karmaṇām anārambhān naiṣkarmyaṁ puruṣo 'ś
nute |
na ca saṁnyasanād eva siddhiṁ samadhigacchati ||
(3.4)

人は行為を意図することなしに、行為の離脱
(naiṣkarmya ; 知の完成の手段、N註)を味わうことは
ない。また、厭離のみによって完成(siddhi ; 解脱の
完成、N註)に至ることはない。

至尊へ行為を捧げることが厭離の方法として用いられて
いる。

mayi sarvāṇi karmāṇi saṁnyasyādhyātma-cetasā |
nirāśīr nirmamo bhūtvā yudhyasva vigata-jvaraḥ ||
(3.30)

われに一切の行為を捧げて(saṁnyasya 厭離し
て)、最上の心(adhyātma-cetas)をもって、願望なく
(nirāśī), 我欲なき者(nirmama)となって、苦熱を離

れて戦うべし。

ye tu sarvāṇi karmāṇi mayi saṁnyasya mat-parāḥ |
ananyenaiva yogena mām dhyāyanta upāsate ||
(12.6)

teṣāṁ ahaṁ samuddhartā mṛtyu-saṁsāra-sāgarāt |
bhavāmi na cirāt pārtha mayy āveśita-cetasāṁ ||
(12.7)

しかし、一切の行為をわれに捧げて(saṁnyasya 厭
離して)、われに集中し、まさに他念なきヨーガによっ
てわれを静慮しつつ親近する者たち(12.6)、われに心
を向けるそれらの者たちにとって、われは直ちに死と
輪廻の海からの救済者となる、プリター夫人の子よ
(12.7)。

yat karoṣi yad aśnāsi yaj juhoṣi dadāsi yat |
yat tapasyasi kaunteya tat kuruṣva mad-arpaṇ
am || (9.27)

汝が行うこと、食べること、供えること、施すこと、
苦行をなすこと、それをわれへの捧げものとして行う
べし。

śubhāśubha-phalair evaṁ mokṣyase karma-bandhan
aiḥ |

saṁnyāsa-yoga-yuktātmā vimukto mām upaiṣyasi ||
(9.28)

このようにして、汝は浄・不浄の果報をもたらす行為
の束縛から解放されるだろう。[行為の果報の、N註]
厭離のヨーガによってアートマンを心統一した汝は、
解脱してわれに至るであろう。

cetasā sarva-karmāṇi mayi saṁnyasya mat-parāḥ
|
buddhi-yogam upāśritya mac-cittaḥ satataṁ bha
va || (18.57)

心によって一切の行為をわれに捧げて(saṁnyasya
厭離して)、われに集中し、ブッディ・ヨーガ(知性
による心統一)に依止して、常にわれに心向けよ。

このように、厭離の対象となっているのは、「(一切の)
行為」(3.30, 4.41, 5.13, 12.6, 18.57)である。また、先
に挙げた「意欲」(6.2, 6.4), 「行為」(5.1~2)も厭離の対
象として挙げられるだろう。

厭離の方法は、「ヨーガによって行為を厭離し」(4.41)
とあるようにヨーガである。また、「意(manasa)によっ
て一切の行為を厭離し」(5.13)とある。BhGにおいては、古

典ヨーガ説のように整然とした心統一法は説かれていないが、6.10～15に説かれるヨーガ(心統一)においては、「アトマンを常に心統一し、意を抑制するヨーガ行者は、われに内在する最高の涅槃である寂靜に到達する」(6.15)とあるように、意の抑制が重視されている。

4.41のヨーガによって到達するのは、「行為は束縛しない」つまり行為の束縛を受けない状態である。個我は「行わず、行わせる」(5.13) ことのない状態つまり無作に安住すると説かれている。また、「厭離によって、行為の離脱という最高の完成に到達する」(18.49)と説かれているが、「人は行為を意図することなく、行為の離脱(naiṣkarma; 知の完成の手段、N註)を味わうことはない」、また「厭離のみによって完成に至ることはない」(3.4)とも説かれ、一致した見解は説かれていない。18.49では行為否定の見解が表れ、3.4では行為肯定の見解が強く表れていると指摘し得るのみである。

また、「われに一切の行為を捧げる(厭離する)」(3.30, 12.6, 18.57) ことも、厭離の方法となっている。至尊に行為を捧げる行法は「他念なきヨーガ」(12.6)、「厭離のヨーガ」(9.28)、「われへのヨーガ(mad-yoga)」(下記12.11)と呼ばれている。他念なきヨーガによって至尊に親近する者は、「直ちに死と輪廻の海から救済」(12.7)され、「行うこと、食べること、供えること、施すこと、苦行をなすこと」(9.27)を至尊への捧げものとして行う厭離のヨーガにより「浄・不浄の行為の束縛から解放され」、「解脱してわれに至るであろう」(9.28)と説かれている。

行為の厭離については以上である。意欲(saṅkalpa)については、意欲の厭離によってヨーガ行者は「ヨーガに登った」(6.4)境地を得る。また、意欲は「欲望を生じる」ものとなっているが、その「すべての欲望を残らずに放棄し」、「意によって感官の群をすべて抑制する」(6.24)ヨーガ行者は、「意が寂靜となる」ことで「至上の幸福」を得、「ブラフマンとなる」(6.27)と説かれている。6.4では、ヨーガに登った者とは、「感官対象」および「行為」に執着なき者ともなっている。

3.2. 厭離者

厭離者については次の用例がある。

jñeyah sa nitya-saṁnyāsī yo na dveṣṭi na kāmṁkṣati |
nirdvandvo hi mahābāho sukhaṁ baṁdhāt pramuc
yate || (5.3)

憎悪なく、希求なき者、彼は常なる厭離者と知られる

べきである。なぜならば、長き腕の者よ、相対を離れた者は、容易に束縛(輪廻、N註)から離れるからである。

śrībhagavān uvāca |

anāśritaḥ karma-phalaṁ kāryaṁ karma karoti yaḥ |
sa saṁnyāsī ca yogī ca na niragnir na cākriyaḥ ||
(6.1)

聖なる至尊は言った。

行為の果報に依止せず、なすべき行為をなす者、彼は厭離者にして、またヨーガ行者である。〔単に〕祭火なき者、またなさざる者(口・意・身の行為を放棄する者、N註)はそうではない。

aniṣṭam iṣṭam miśraṁ ca tri-vidhaṁ karmaṇaḥ ph
alam |

bhavaty atyāgināṁ pretya na tu saṁnyāsinaṁ kva
cit || (18.12)

〔行為の果報を〕放棄しない者たちには、来世で、望ましくないもの(奈落や畜生などの形態、N註)、望ましいもの(天神などの形態、N註)、および〔これらの〕混合のもの(人間の形態、N註)、三種の行為の果報がある。しかし、厭離者たちには〔これら三種は〕どこにもない。

このように、厭離者とは、「憎悪なく、希求なき者」であり、「相対を離れる」ことで「容易に束縛(輪廻、N註)から離れる」(5.3) ことができる者ともなっている。また、厭離者は「ヨーガ行者」であるとも説かれ、「行為の果報に依止せず、なすべき行為をなす者」(6.1)ともなっている。また、厭離者たちには、来世において「望ましくないもの(奈落や畜生などの形態、N註)」「望ましいもの(天神などの形態、N註)」「〔これらの〕混合のもの(人間の形態、N註)」という「三種の行為の果報」(18.12)はないという。これを辻は、「真の遠離者(本稿では、厭離者)は解脱する」と、解脱の意味に解釈している(辻1980 : 305)。

4. 放棄について

次に放棄に関する用例を挙げる。

4.1. 放棄の対象、放棄の方法、放棄によって到達する境地

厭離では、「厭離の方法」によって用例を分類したが、放棄では「放棄の方法」よりも「放棄の対象」について説く用例が多いので、まずは対象ごとに用例を提示する。

戦いにおいては、生命、財産を放棄して戦場に集うものとなっている。

ドゥルヨーダナ(百王子の長兄、クル軍)は、敵陣(アルジュナを含む五王子の軍勢、パーンドゥ軍)を見て、師(ドローナ、N註。五王子と百王子双方の武門の師、クル軍の指揮官)に語りかける。

anye ca bahavaḥ sūrā mad-arthe tyakta-jīvitāḥ |
nānāśastra-praharaṇāḥ sarve yuddha-viśāradaḥ ||
(1.9)

またこの他、私のために生命を放棄する多くの英雄たちは、種々の刀剣や武器(打撃用の棍棒など、N註)を持つ者であり、皆、戦いに熟達している。

アルジュナは、敵陣に居並ぶ自分の師匠や親族のために王位を望んだのであって、彼らを討つことは望まない⁽¹⁾と言う。

yeṣām arthe kāṅkṣitaṃ no rājyaṃ bhogaḥ sukhāni
ca |
ta ime 'vasthitā yuddhe prāṇāṃs tyaktvā dhanāni
ca || (1.13)

王位はその人々のために我々の望むところであった。享楽また幸福も[そうである]。その人々が、生命と財産を放棄して戦場に立っている。

「無上の憐愍にとりつかれ、意気消沈」(1.28)するアルジュナに、クリシュナは檄を飛ばし、心の弱さを放棄せよと言う。

klaibyaṃ mā sma gamaḥ pārtha naitat tvayy upa-
adyate |
kṣudraṃ hṛdaya-daurbalyaṃ tyaktvottiṣṭha param-
apa || (2.3)

ブリター夫人の子よ、臆病に陥ることなかれ、これは汝に相応しくない。卑しむべき心(hṛdaya)の弱さを放棄して立ち上がれ、敵を悩ます勇士よ。

一切の所有の放棄が説かれている。

nirāśir yata-cittātmā tyakta-sarva-parigrahaḥ |
śārīraṃ kevalaṃ karma kurvan nāpnoti kilbiṣaṃ ||
(4.21)

願望なく、心とアートマン(身体、N註)を抑制し、一切の所有を放棄した者は、ただ身体の行為を行っても、罪過を得ることはない。

身体の放棄が説かれている。

janma karma ca me divyam evaṃ yo vetti tattvat-
aḥ |

tyaktvā dehaṃ punar janma naiti mām eti so 'rju-
na || (4.9)

われの神聖なる出現と行為とを、このように如実に知る者、その者は身体を放棄した後、再生することなくわれに到達する、アルジュナよ。

yaṃ yaṃ vā 'pi smaran bhāvaṃ tyajaty ante kalev-
aram |
taṃ tam evaiti kaunteya sadā tad-bhāva-bhāvit-
aḥ || (8.6)

臨終において、たとえ人がいかなる状態を憶念しつつ、身体を放棄するとしても、彼は必ずそれ(念じた状態)に赴く、常にその状態に薫習されて、クンティー夫人の子よ。

om ity ekākṣaraṃ brahma vyāharan mām anusmar-
an |

yaḥ prayāti tyajan dehaṃ sa yāti paramāṃ gat-
im || (8.13)

オームという一音のブラフマンを唱えながら、われを憶念し、身体を放棄して行く者、彼は最高の境界に至る。

行為の果報の放棄については次のように説かれている。

karma-jaṃ buddhi-yuktā hi phalaṃ tyaktvā maṇiṣ-
ṇaḥ |
janma-bandha-vinirmuktāḥ padaṃ gacchanty anā-
myaṃ || (2.51)

なぜならば、知性(buddhi)によって心統一した知者たちは、行為より生じる果報を放棄して、生の束縛から離れ、患いのない境地に赴くからである。

yuktaḥ karma-phalaṃ tyaktvā śāntim āpnoti naiṣṭ-
hikīm |

ayuktaḥ kāma-kāreṇa phale sakto nibadhyate ||
(5.12)

心統一した者は、行為の果報を放棄して、究竟の寂静に到達する。心統一しない者は、欲望の作用によって果報に執著し束縛される。

athaitad apy aśakto 'si kartuṃ mad-yogaṃ āśritaḥ
|

sarva-karma-phala-tyāgaṃ tataḥ kuru yatātma-
vān || (12.11)

もし、われへのヨーガ(mad-yoga)に従事する汝が、これさえも行うことができないなら、その時は、アートマン(自己)を制し、一切の行為の果報の放棄をなせ。

śreyo hi jñānam abhyāsāj jñānād dhyānaṃ viśiṣya
te |

dhyānāt karma-phala-tyāgas tyāgac chāntir ananta
ram || (12.12)

なぜならば、知は修習 (abhyāsāt) より優れ、静慮 (dhyāna 禅定) は知より優れ、行為の果報の放棄は、静慮 [より優れ]、放棄より直ちに寂静 [が生じる] からである。

行為の果報への執著の放棄が説かれている。

tyaktvā karma-phalāsaṅgaṃ nitya-trpto nirāśrayaḥ |
karmaṇy abhipravṛtto 'pi naiva kiñcit karoti saḥ ||
(4.20)

行為の果報への執著を放棄して、いつも満足している人、[他に] 依存することのない人は、行為に従事しても、実に彼は決して行為していないのである。

執著の放棄については次の通りである。

yoga-sthaḥ kuru karmāṇi saṅgaṃ tyaktvā dhanañj
aya |

siddhy-asiddhyoḥ samo bhūtvā samatvaṃ yoga ucy
ate || (2.48)

富を得る者よ、ヨーガに安立し、執著を放棄して、成功・不成功に平等となって行為を実行せよ。平等観 (samatva) がヨーガと言われる。

kāyena manasā buddhyā kevalair indriyair api |
yoginaḥ karma kurvanti saṅgaṃ tyaktvā 'tma-śud
dhaye || (5.11)

ヨーガ行者たちは、身体によって、意 (manas) によって、知性 (buddhi) によって、また単に諸感官によって、執著を放棄して、アートマンを清めるために行為をなす。

brahmaṇy ādhāya karmāṇi saṅgaṃ tyaktvā karoti
yaḥ |

lipyate na sa pāpena padma-patram ivāmbhasā ||
(5.10)

ブラフマンにすべての行為を捧げ、執著を放棄して行う者、彼はあたかも蓮華の葉が水によって汚されないように、罪悪によって [汚されることはない]。

ブラフマンへ到達するための行法に、声などの感官対象および愛著と憎悪の放棄が説かれている。

buddhyā viśuddhayā yukto dhṛtyā 'tmānaṃ niya
ya ca |

śabdādīn viśayāṃs tyaktvā rāga-dveṣau vyudasya

ca || (18.51)

清浄なる知性 (buddhi) によって心統一し、また堅固によってアートマン (自己) を抑制し、声などの感官対象を放棄し、かつ愛著・憎悪を放棄し、

vivikta-sevi laghvāśi yata-vāk-kāya-mānasaḥ |
dhyāna-yoga-paro nityaṃ vairāgyaṃ samupāsrit
aḥ || (18.52)

閑寂 [所] に住み、少食であり、口・身・意を抑制し、常にディヤーナ・ヨーガ (dhyāna-yoga 静慮による心統一) に集中し、離欲に依止し、

ahaṅkāraṃ balaṃ darpaṃ kāmaṃ krodhaṃ parigr
aham |

vimucya nirmamaḥ śānto brahma-bhūyāya kalpa
te || (18.53)

我執・暴力・傲慢・欲望・怒り・所有を去って、我欲なく (nirmama)、寂浄なる者は、ブラフマンとなる資格をもつ。

欲望、怒り、貪欲は奈落の三重の門とされ、その放棄が説かれている。

tri-vidhaṃ narakasyedaṃ dvāraṃ nāśanam ātma
naḥ |

kāmaḥ krodhas tathā lobhas tasmād etat trayaṃ t
yajet || (16.21)

欲望・怒りおよび貪欲、これは、アートマン (自我) を破壊する奈落の三重の門である。それ故に、この三つを放棄せよ。

このように放棄の対象となっているのは、「生命」(1.9)、「生命と財産」(1.33)、「卑しむべき心の弱さ」(2.3)、「身体」(4.9, 8.6, 8.13)、「行為より生じる果報」(2.51)、「(一切の) 行為の果報」(5.12, 12.11, 12.12)、「行為の果報への執著」(4.20)、「執著」(2.48, 5.11, 5.10)、「声などの感官対象」「愛著、憎悪」(18.51)、「欲望、怒り、貪欲」(16.21)である。

これらの放棄の対象のうち、放棄の方法とそれによって到達する境地について説く用例は次の通りである。

「身体」の放棄つまり臨終時において、人は、その念じた状態に赴く (8.6) とされ、「それ故に、すべての時において、われを憶念せよ、そして戦うべし」(8.7) と説かれている。クシャトリヤ (王侯・武士階級) の法においては、「世界の保護 (loka-saṃgraha)」(3.20, 3.25) が最も重要である。保護を行う統治者として、有事の際、その命を晒し戦場で戦うクシャトリヤは、死と直面するが、死において、至尊

に「意と知性とを置」いて憶念することで「疑いなくまさにわれに到達するであろう」(8.7)と説かれている。至尊は、「無上の境界であるわれに安立する」(7.18)とあるように、到達すべきひとつの境地となっている。

また、「一切の門(諸感官, N註)を抑制して、また意(manas)を心腑(hrd)の中に閉じ込めて、呼吸を自己の額に置いて、ヨーガの堅持に安立する者」(8.12)は、「オームという一音のブラフマンを唱えながら」至尊を「憶念する」ことで「最高の境界に至る」(8.13)と説かれている。

このように、身体の放棄においては、至尊を憶念する行法とともに説かれていることがわかる。また、身体の放棄においては、至尊の「出現と行為」を「如実に知ること」によって「われに到達する」(4.9)と説かれている。至尊の出現と行為とは、次のように説かれている。

バラタの子孫よ、実に、法の衰微あり、非法の興起があるたびに、その時われは自己(アートマン)を現すのである。(4.7)

善人の救助のために、悪行者の滅尽のために、法の樹立を目的として、われは各ユガ期に現れる。(4.8)

「一切の所有」の放棄においては、「願望なく、心とアートマン(身体, N註)を抑制」することによって、「身体の行為を行っても、罪過を得ることはない」(4.21)状態を得るという。

「行為の果報」の放棄については、「知性によって心統一した知者たち」(2.51),「心統一した者」(5.12)が放棄する者となっている。これによって、「生の束縛を離れ、患いのない境地に赴く」(2.51),「究竟の寂靜に到達する」(5.12)という。

また、12.11~12の前方には、至尊に「意を置き、知性に向けること」で「必ずわれに住するだろう」(12.8)と至尊への到達が説かれている。至尊に「心(citta)を集中する」(12.9)行ができない場合は、「(ヨーガの)修習」(12.9~10)をなすように説く。修習ができない場合、「われのための行為に集中してあれ」(12.10)と説く。12.11の「これ」とは、至尊に行為を捧げる「われへのヨーガ(mad-yoga)」と考えられるが、この行ができない場合は、「アートマンを制し、一切の行為の果報の放棄をなせ」(12.11)とあるように様々な行が表れている。12.8について、BhGで「最高の心統一者(yuktatama)」の用例は二例あるが、至尊に「内我」(6.47),「意」を向けて「常に心統一する」(12.2)者が最高の心統一者となっている。つまり、12.8は、心統一における最高の行を説くものと考えられる。12.12では、修

習→知→静慮→放棄の順で行の優劣が列挙され、「放棄により直ちに寂靜〔が生じる〕」(12.12)と、放棄が最も重要な行法となっている。12.9~10の行法ができない者に示される「アートマンを制する」(12.11)行は、行為の果報を放棄する行とともに寂靜へ至る行の一環をなすものと見られる。また、「知性による心統一」(2.51),「心統一」(5.12)は、放棄の直接的な行法とはなっていないようであるが、2.51, 5.12からは、心統一した者(ヨーガに安立した者)には必然的に放棄が具わるものと考えられる。

「行為の果報への執著」を放棄する者は、「行為に従事しても、実に彼は決して行為していない」(4.20)という。

「執著」の放棄については、「行為を実行せよ」(2.48),「アートマンを清めるために行為をなす」(5.11),「行う」(5.10)とあるように、執著の放棄は、行為の実行と結び付いている。厭離の用例では至尊に行為を捧げる例が散見されたが、放棄においては、「ブラフマンにすべての行為を捧げる」ことが説かれ、これによって「罪悪によって〔汚されることはない〕」(5.10)という。

「声などの感官対象」「愛著、憎悪」の放棄は、「知性による心統一」「アートマンの抑制」「口・身・意の抑制」(18.51),「ディヤーナ・ヨーガ(dhyāna-yoga 静慮による心統一)」(18.52)などとともに「ブラフマンとなる資格をもつ」(18.53)ための条件となっている。また、「離欲」(18.52),「我執・暴力・傲慢・欲望・怒り・所有」「我欲」(18.53)も離れるべきものとして挙げられている。

この他、下記の用例において「執著と果報」(18.6, 18.9),「一切の法」(18.66)の放棄も説かれている。

4.2. 放棄者

放棄者については次のように説かれている。

anapekṣaḥ śucir dakṣa udāsīno gata-vyathāḥ |
sarvāraṃbha-parityāgī yo mad-bhaktaḥ sa me priyaḥ || (12.16)

期待することなく、高潔であり、賢明であり、中立であり、動揺がなく、一切の意図の放棄者であり、われを敬信する者、その者はわれの親愛なる者である。

mānāpamānayos tulyas tulyo mitrārī-pakṣayoḥ |
sarvāraṃbha-parityāgī guṇātītaḥ sa ucyate || (14.25)

尊敬と軽蔑に対して同一、友と敵の両方に対して同一、一切の意図の放棄者、彼はグナを超越した者と言われる。

yo na hr̥ṣyati na dveṣṭi na śocati na kāmṣati |
śubhāśubha-parityāgī bhaktimān yaḥ sa me priy
aḥ || (12.17)

喜ばず、憎まず、悲しまず、願わず、浄・不浄の放棄者、敬信ある者、彼はわれの親愛なる者である。

na dveṣṭaty akuśalaṁ karma kuśale nānuṣajjate |
tyāgī sattva-samāviṣṭo medhāvī chinna-saṁśayaḥ ||
(18.10)

サットヴァに満ちた、聡明な、疑惑を断ち切った放棄者は、不善な行為を憎まず、また、善〔なる行為〕において執著しない。

na hi deha-bhṛtā śakyam tyaktuṁ karmāṇy aśeṣat
aḥ |
yas tu karma-phala-tyāgī sa tyāgīty abhidhīyate ||
(18.11)

実に身体をもつ者によって、すべての行為を残りになく放棄することはできない。しかし、行為の果報を放棄する者は、放棄者と呼ばれる。

放棄者(tyāgin)とは、「一切の意図」(12.16, 14.25)、「浄・不浄」(12.17)、「行為の果報」(18.11)を放棄する者となっている。

行為に関して、「サットヴァに満ちた、聡明な、疑惑を断ち切った放棄者は、不善な行為を憎まず、また、善〔なる行為〕において執著しない」(18.10)。また、「身体をもつ者によって、すべての行為を残りになく放棄することはできない。しかし、行為の果報を放棄する者は、放棄者と呼ばれる」(18.11)と説かれている。つまり行為をなすのである。サットヴァは、サーンキヤ説において万物の物質的な根源であるプラクリティ(prakṛti 根本原質)を構成する三つのグナ(guṇa サットヴァ、ラジャス、タマス)のひとつである。

また、放棄者とは、至尊にとって親愛なる者(12.16～17)、グナを超越した者(14.25)となっている。グナの超越には、「尊敬と軽視」「友と敵」(14.25)のような相対事項を同一と見る平等観が表れている。また、至尊にとって親愛なる者は、至尊を敬信(12.16～17)し、「高潔であり、賢明であり、中立であり」、「期待すること」「動揺」がない者、「喜び」「憎しみ」「悲しみ」「願うこと」のない者となっている。これらの特徴も放棄者の具える特徴と見てもよいかと考えられる。

4.3. 放棄と行為の立場

本論の冒頭で取り挙げた「厭離と放棄の真義」(18.1)についての問いの答えは、「欲望に基づく行為の除去」が厭離、「一切の行為の果報を放棄すること」(18.2)が放棄とされ、いずれも行為に関するものとなっている。以下の用例では、「行為肯定の立場」「行為否定の立場」そして「第三の立場」という行為の立場が表れている。

行為を「放棄すべきである」「放棄すべきではない」という相対立する見解が示されている。

tyājyaṁ doṣavad ity eke karma prāhur manīṣiṇaḥ |
yajña—dāna—tapaḥ—karma na tyājyaṁ iti cāpare ||
(18.3)

ある知者は言う。行為は罪業があるために放棄すべきであると。また他の者は、祭祀・布施・苦行の行為は、放棄すべきではないと〔言う〕。

BhGの行為の立場は、行為の放棄ではなく、行為における放棄をなすことである。

niścayaṁ śṛṇu me tatra tyāge bharatasattama |
tyāgo hi puruṣa-vyāghra tri-vidhaḥ saṁprakīrtit
aḥ || (18.4)

バラタ族の最上者よ、ここに放棄におけるわれの結論を聞くべし。虎のような人よ、実に放棄は三種であると言われる。

yajña—dāna—tapaḥ—karma na tyājyaṁ kāryam eva tat |
yajño dānaṁ tapaś caiva pāvanāni manīṣiṇām ||
(18.5)

祭祀・布施・苦行の行為は、放棄すべきではない。まさにそれはなすべきことである。祭祀、布施また苦行は、知者たちの浄化の手段である。

etāny api tu karmāṇi saṅgaṁ tyaktvā phalāni ca |
kartavyānīti me pārtha niścitaṁ matam uttam
am || (18.6)

しかし、これらの行為も、執著と果報とを放棄してなすべきである。これがわれの決定的な最上の見解である、プリター夫人の子よ。

このように、「行為は罪業があるために放棄すべきである」(18.3)という行為否定の立場の見解と、「祭祀・布施・苦行の行為は、放棄すべきではない」(18.3)という行為肯定の立場の見解があるということが示されている。この二つの見解に対して、「われの決定的な最上の見解である」

(18.6)として説かれているのは、「祭祀・布施・苦行の行為は、放棄すべきではない。まさにそれはなすべきことである」(18.5)と行為が肯定されるが、その行為は「しかし、これらの行為も、執著と果報とを放棄してなすべきである」(18.6)と行為否定の立場の特徴である放棄の観念を保持した行為、つまり第三の立場の行為となっている。

生得の行為は放棄すべきではないと説かれている。

sahajaṃ karma kaunteya sa-doṣaṃ api na tyajet |
sarvārāmbhā hi doṣeṇa dhūmenāgnir ivāvṛtāḥ ||
(18.48)

クンティ夫人の子よ、生得の行為は、たとえ欠点ありとも、放棄すべきではない。なぜならば、一切の意図は欠点によって覆われているからである。あたかも火が煙によって〔覆われている〕ように。

以上、放棄に関する用例で「放棄すべきではない」行為として説かれる行為の内容とは、「祭祀」「苦行」「布施」(18.5)、「生得の行為」(18.48)である。そして、生得の行為を肯定する理由として「一切の意図」が「欠点によって覆われているから」であると説かれている。

生得の行為とは、前偈(18.47)にある「本性に定められた行為」の言い換えの言葉となっている。本性(svabhāva)とは、プラクリティの異称である。定められた行為については、

敵を悩ます勇士よ、バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャおよびシュードラの行為は、〔各種姓の〕本性(svabhāva)に優勢なグナによって配分された。(18.41)とあるように、四姓の行為は本性に優勢なグナによって出来ている。またそれは、至尊によって創造されたものとなっている。

グナと行為〔の区分〕に応じて、四姓はわれによって創造された。(4.13)

つまり、生得の行為とは、自己の本性に最も適った行為であり、そのため放棄すべきではないものとなっている。

グナは、万物の性質を説明する例にも用いられている。三グナによって放棄の在り方は、次のように説明されている。

niyatasya tu saṃnyāsaḥ karmaṇo nopapadyate |
mohāt tasya parityāgas tāmasaḥ parikirtitaḥ ||
(18.7)

しかし、定められた行為(niyatasya karmaṇo)の厭離は適当ではない。その迷妄により〔定められた行為を、

N註〕放棄することは、タマス(痴闇)性と称される。

duḥkham ity eva yat karma kāya-kleśa-bhayāt tyajet |

sa kṛtvā rājasam tyāgaṃ naiva tyāga-phalam labhet || (18.8)

ただ苦しみであると身体の苦痛の恐怖のために、人が行為を捨てるならば、それは、ラジャス(激情)性の放棄をなすのであり、決して放棄の果報を得ないだろう。

kāryam ity eva yat karma niyataṃ kriyate 'rjuna |
saṅgam tyaktvā phalam caiva sa tyāgaḥ sātत्वiko mataḥ || (18.9)

アルジュナよ、もし定められた行為が、ただなすべきであると、執著と果報を放棄してなされるならば、その放棄はサットヴァ(純善)性であると考えられる。

このように、タマス性の放棄とは、「迷妄により〔定められた行為を、N註〕放棄すること」(18.7)であり、ラジャス性の放棄とは、「ただ苦しみであると身体の苦痛の恐怖のために、人が行為を捨てる」(18.8)ことである。このような放棄では、「決して放棄の果報を得ないだろう」(18.8)と説かれる。また、サットヴァ性の放棄とは、「定められた行為が、ただなすべきであると、執著と果報を放棄してなされる」(18.9)ことである。このように、三グナによる放棄とは、定められた行為における放棄である。

定められた行為とは、「自己の法(svadharma)」(18.47)とも呼ばれるが、一切の法をも放棄せよと、次のように説かれる。

sarva-dharmān parityajya mām ekaṃ śaraṇam vraja |

ahaṃ tvā sarva-pāpebhyo mokṣayiṣyāmi mā śucaḥ || (18.66)

一切の法(dharma 慣例; アグニホートラなど, N註)を放棄して、われを唯一の保護所とせよ。われは汝を一切の害悪から解放しよう、憂うるなかれ。

次に、神性と阿修羅性について説く用例を挙げる。これらもプラクリティが関係している。

4.4. 神性と阿修羅性の特徴としての放棄

「この世界における二つの万物創造がある。実に、神性と阿修羅性とはである」(16.6)と説かれ、これらは「神のプラクリティ」(9.13)と「羅刹のまた実に阿修羅的な迷乱に導くプラクリティ」(9.12)というプラクリティによる区分

としても説かれている。この神性と阿修羅性の特徴に放棄の有無が次のように説かれている。

神性については次の通りである。

śribhagavān uvāca |

abhayaṃ sattva-saṃśuddhir jñāna-yoga-vyavasthit
iḥ |

dānaṃ damaś ca yajñaś ca svādhyāyas tapa ārjav
am || (16.1)

ahiṃsā satyam akrodhas tyāgaḥ śāntir apaiśunam |
dayā bhūteṣv aloluptvaṃ mārdaṃ hrīr acāpal
am || (16.2)

tejaḥ kṣamā dhṛtiḥ śaucam adroho nātimānitā |
bhavanti sampadaṃ daivīm abhijātasya bhārata ||
(16.3)

聖なる至尊は言った。

無畏、心の清浄(心に汚れなきこと、N註)、ジュニャーナ・ヨーガにおける安立、布施、自制と、祭祀と、誦誦(ヴェーダの学習、N註)、苦行、正直(16.1)、不殺生、真実、怒りなきこと、放棄、寂静、誹謗なきこと、万物に対する慈悲、無欲、柔和、恥じらい、冷静であること(16.2)、威光、忍耐、堅固、高潔、害意なきこと、謙譲、〔これらは〕神性に生まれついた者に具わるものである、バラタの子孫よ(16.3)。

阿修羅性について説明する一段(16.7~20)の締めくくりとして次のように放棄が説かれている。

tri-vidhaṃ narakasyedaṃ dvāraṃ nāśanam ātman
aḥ |

kāmaḥ krodhas tathā lobhas tasmād etat trayam t
yajet || (16.21)

欲望・怒りおよび貪欲、これは、アートマン(自我)を破壊する奈落の三重の門である。それ故に、この三つを放棄せよ。

このように、「神性に生まれついた者に具わるもの」(16.3)として「放棄」(16.2)が挙げられている。また、阿修羅性に生まれついた者の特徴は、「偽善、傲慢、高慢および怒り、ならびに粗暴、また無知」(16.4)となっている。

阿修羅性の者については、「我執・暴力・傲慢・欲望および怒りに依止し、自分と他人の身中にあるわれ(至尊)を憎む、不機嫌になって」(16.18)とあるように、その特徴として欲望(kāma)に囚われているとする例が多く見出

される(16.8, 16.10~12, 16.16, 16.18)。阿修羅性の者が赴くのは「奈落(naraka 地獄)」(16.16)である。至尊は、このような阿修羅性の者を「輪廻の度に、絶えず不浄なる阿修羅性の胎に投下」(16.19)し、「それぞれの誕生において、阿修羅性の胎に墮し、迷乱し、かつてわれに到達せずして、それにより彼らは最悪の境界に至る」(16.20)という。それ故に、「アートマン(自我)を破壊する奈落の三重の門」とされる「欲望・怒りおよび貪欲」「この三つを放棄せよ」(16.21)とその放棄が説かれている。そして、「これら暗黒の三門より解放された人は、アートマン(自我)のために至福を修め、それにより最高の境界に至る」(16.22)と説かれている。

5. 厭離、放棄の対象とグナ

これまでに見出された厭離と放棄の対象と、グナとの関係については次のように指摘できる。

まず、厭離の対象として「行為」(4.41, 5.13)が挙げられている。行為を構成する一切は、プラクリティのグナより生じるものとなっている(類似の例13.20)。

prakṛteḥ kriyamāṇāni guṇaiḥ karmāṇi sarvaśaḥ |
ahaṅkāra-vimūḍhātma kartā 'ham iti manyate ||
(3.27)

あらゆる行為は、一切においてプラクリティのグナによってなされる。自我意識(ahaṅkāra 我執)によって、アートマンが迷乱させられている者は、自分が行為者であると考え。

また、「すべての者は、プラクリティより生じるグナによって、意志に反して行為をなさしめられるが故に」「いかなる人であれ、一瞬といえども、決して行為せずに存在することはできない」(3.5)とも説かれている。行為を肯定する理由が、プラクリティのグナに置かれている。

行為否定の立場で行為が否定されるのは、それが精神の束縛を招くものであるためである。「あらゆる行為はグナによってなされる」(3.27)が、三グナは不滅の個我(精神)を肉体に束縛するという。

sattvaṃ rajas tama iti guṇāḥ prakṛti-sambhavāḥ |
nibadhnanti mahābāho dehe dehinam avyayam ||
(14.5)

長き腕の者よ、サットヴァ(sattva 純善)、ラジャス(rajas 激情)、タマス(tamas 痴闇)というプラクリティ(根本原質)より生じる〔三〕グナは、不滅の個我

(dehin)を肉体に束縛する。

直接、厭離の対象となっているものではないが、「渴望」(18.49)には、ラジャスが関係している(下記14.12)。

次に、放棄の対象として「執著(saṅga)」(2.48, 5.10, 5.11), 「愛著(rāga)」(18.51), 「欲望(kāma), 怒り(krodha), 貪欲(lobha)」(16.21), 「一切の意図(sarvārambha)」(12.16, 14.25)がある。これらとグナとの関係は次の通りである。

「執著」は、三グナそれぞれが引き起こす作用であり、サットヴァは「楽への執著」と「知への執著」によって個我を束縛し(14.6), ラジャスは「渴愛(trṣṇā)と執著(saṅga)とを生じ」, 「行為への執著」によって個我を束縛し(14.7), タマスは「無知より生じ」「すべての個我にとって迷妄をもたらすもの」であり, 「放逸・怠惰・睡眠によって」個我を束縛する(14.8)ものとなっている。また、次のようにも説かれている。

sattvaṃ sukhe saṃjayati rajaḥ karmaṇi bhārata |
jñānam āvṛtya tu tamaḥ pramāde saṃjayaty uta ||
(14.9)

サットヴァは、楽に執著させ、ラジャスは行為に「執著させる」, しかしタマスは、知を覆って放逸に執著させるのである、バラタの子孫よ。

「愛著(rāga)」はラジャスの本性であるとされている。

rājo rāgātmakam viddhi trṣṇā-saṅga-samudbhavam |
tan nibadhnāti kaunteya karma-saṅgena dehin
am || (14.7)

ラジャスは激情(rāga)を本性とし、渴愛(trṣṇā)と執著(saṅga)とを生じるものと知るべし。それ(ラジャス)は、行為への執著によって個我を束縛する。

「貪欲」「一切の意図」もラジャスより生じるものとなっている。

lobhaḥ pravṛttir ārambhaḥ karmaṇām aśamaḥ spr
hā |
rajasy etāni jāyante vivṛddhe bharatarṣabha ||
(14.12)

貪欲、活動、さまざまな行為の意図、平静なきこと、渴望、これらはラジャスが増大したときに生じる、バラタ族の雄牛よ。

「欲望」「怒り」もまたラジャスより生じると説かれている。

śribhagavān uvāca |
kāma eṣa krodha eṣa rajo-guṇa-samudbhavaḥ |

mahāśano mahāpāpmā viddhy enam iha vairiṇ
am || (3.37)

聖なる至尊は言った。

これは欲望である。これは怒りである。ラジャスのグナより生じ、大食にして大邪悪である。これをこの世における敵であると知るべし。

この他、「行為の果報」「行為の果報への執著」が放棄の対象となっている。三グナによる行為の果報は、サットヴァ性では「無垢」、ラジャス性では「苦」、タマス性では「無知」(14.16)である。

このように、厭離の対象である「行為」が「一切においてプラクリティのグナによってなされる」(3.27)ものとなっている。三グナは、互いに拮抗し、一つのグナが増大した時に、他の二つは抑制される性質をもつ(14.10~13)。「渴望」は、厭離の対象ではないが、ラジャスの増大時に生じるもの(14.12)となっている。そして、すべてに執著なき知性を持ち、アートマンを克服し、渴望を離れた者は、「厭離によって、行為の離脱(naiṣkarmya)という最高の完成に到達する」(18.49)という。4.41に、「ヨーガによって行為を厭離した者」を「行為は束縛しない」と説かれているのは、行為を生じるグナの作用を離れているためであると考えられる。

放棄の対象については次の通りである。「執著」は、三グナがそれによって個我を束縛する作用となっている。そして、「プラクリティのグナに迷乱した者たちは、グナによる行為に執著する」(3.29)という。「執著を放棄して行う」ことで「罪悪によって汚されることはない」(5.10), ヨーガ行者は、「執著を放棄して、アートマンを清めるために行為をなす」(5.11)とあるように、罪悪に汚されず、行為をなしてもアートマンの清浄を保てるのは、執著を生じるグナを放棄しているためであると考えられる。

また、18.10では、サットヴァに満ちた放棄者とは、善・不善の行為に執著しない(18.10)者となっている。行為への執著は、ラジャスのもたらす作用(14.7, 14.9)である。14.25には、グナを超越する者つまり、サットヴァをも超越する者の特徴として、相対事項を同一視する平等観が表れている。

「激情、愛著(rāga)」はラジャスの本性とするもの(14.7)であり, 「貪欲」「一切の意図」はラジャスが増大する時に生じるもの(14.12)となっている。「欲望」「怒り」もラジャスより生じる(3.37)と説かれている。このように、放棄の

対象は、三グナの中でもラジャスに起因するものが多いことがわかる。

「執著、欲望、怒り、迷妄、憶念の混乱、知性の損失」は、「感官対象を冥想することによって生じ、「知性の損失により、人は滅亡する」(2.62～63)と説かれている。欲望、怒りを生じるラジャスを打倒する方法となっているのは、「最初に諸感官を抑制し」、「諸感官」「意」「知性」「アートマン」の順に前者を後者より「高きものと覚知」し、「アートマンによってアートマンを抑制」する心統一法(3.41～43)である。

6. むすび

以上、BhGにおける「厭離」「放棄」の用例を、『マハーバーラタ』の倫理における三つの行為の立場を判別する、三つの視点(行為の内容、行為の在り方、行為によって到達する境地)を中心に分類し、検討してきた。

厭離と放棄は、行為の在り方に直接関わるものである。そこでは、何を厭離、放棄するのか(対象)、その方法は何かということが重視されるが、BhGがこれについて詳しく説いていることは、用例の分類から見ても明らかである。

方法について、厭離の場合は、行為の厭離方法はヨーガである。ヨーガそのものが厭離であるとも定義(6.2)され、至尊に行為を厭離することも「厭離のヨーガ」(9.28)という一行法となっていることから厭離はヨーガとの関係が強い。放棄の場合は、修習などの行法とは別に放棄が一行法として挙げられる例(12.12)もあり、厭離のようなヨーガとの緊密な結び付きはないようである。ただし、心統一した者には放棄が身に付くものと考えられる。

厭離の対象は「行為」「意欲」である。

放棄の対象は「生命」「財産」「心の弱さ」「身体」「行為の果報」「行為の果報への執著」「執著」「声などの感官対象」「愛著、憎悪」「欲望、怒り、食欲」である。

このように、厭離の場合は、行為を厭離の対象としている。これは、厭離の語が、一切の物質原理(プラクリティから転現するもの)からの捨離を要求するというサーンキヤの言い換えの言葉として用いられていることから、行為そのものを離れようとする傾向を強く示すと言えるだろう。一方、放棄の対象では、行為の果報が挙げられ、行為そのものを放棄の対象としていない。つまり、行為の実行への結びつきが厭離より強いと言える。ただし、厭離者と放棄者の用例では、いずれも行為を実行する者となっている。事実上、厭離も放棄も行為の実行と結び付いているが、

その内面に保持する精神性として行為を離れるか、果報を離れるかということに違いがあり、両語の間に使い分けがあるようである。

また、厭離、放棄の対象には、プラクリティのグナ(3.27)に起因するものがある。特に執著は三グナがそれによって個我を束縛する作用となっており、放棄の対象として最も重要である。また、放棄の対象には、欲望や怒りなどラジャスの作用によって起こるものが多く見出された。

到達する境地について、行為の厭離によって、「行為しても束縛されない」(4.41)。また、執著の放棄によって「行為に従事しても、実に彼は決して行為していない」(4.20)と説かれるのは、あらゆる行為の因となるグナの作用を離れているためであると考えられる。至尊に行為を厭離することで「解脱」(9.28)を得て至尊に至るのも、物質原理および精神原理(dehin, ātmanなどの個我)を統轄する至尊に集中することで、グナの作用を離れるためであると考えられる。

謝辞

本稿執筆にあたって、筆者の指導教員である外薮幸一先生、また鹿児島国際大学名誉教授である中村了昭先生には多忙を極める中、多くのご指導、ご助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

注

- 1) 【saṁnyāsa 5.1, 5.2, 5.6, 6.2, 18.1, 18.2, 18.7, 18.49 ; saṁnyāsa (karma-) 5.2, ; saṁnyāsa (yoga-) 9.28 ; saṁnyāsin 6.1, 6.4, 18.12, (nitya-) 5.3 ; saṁnyasta (yoga-) 4.41 ; saṁnyasya 3.30, 5.13, 12.6, 18.57 ; saṁnyasana 3.4】関係語とは、複合語を含むその語の名詞、形容詞、動詞および分詞などである。
- 2) 【tyāga 18.8, 18.9, 12.11, 12.12, 16.2, 18.1, 18.2, 18.4 ; tyāga-phala 18.8 ; tyāgī 18.10, 18.11 ; parityāgin 12.16, 12.17, 14.25 ; parityāga 18.7 ; parityajya 18.66 ; tyakta 4.21 ; tyakta-jīvita 1.9 ; tyaktum 18.11 ; tyaktvā 1.33, 2.48, 2.51, 4.9, 4.20, 5.10, 5.11, 5.12, 18.6, 18.9, 18.51 ; tyaktvo 2.3 ; tyajati 8.6 ; tyajan 8.13, 16.21, 18.8, 18.48 ; tyājya 18.3, 18.5】
- 3) R.Kinjawadekar (Ed.) (1979). *The Mahābhārata with the Bharata Bhawadeepa Commentary of Nīlakaṇṭha*. New Delhi : Oriental Books Reprint Corporation. 所収の『バガヴァッド・ギーター』。テキストには詩節(偈)の所在を示す偈番号(章・節)または(巻・章・節)が付されている。また、訳においては、同書に添えられているニーラカンタの註釈(略号N註)を常時依用した。訳における()内は語の説明、[]内は語を補ったものである。
- 4) 「長き腕(mahābāho)」は、勇敢な人を讃える呼びかけの言葉。

- 5) 至尊という訳語は金倉(1962)を参照した。
- 6) 厭離の他, ヨーガは「平等観」(2.48), 「苦との結合を離れること」(6.23)もヨーガであると定義されている(cf.上村1991)。
- 7) 「この知性(buddhi)は, サーンキヤ〔の理論〕において汝に説かれた。しかし, [今度は] これをヨーガ〔の実修〕において聞かれよ。ブリター夫人の子よ, その知性によって心統一すれば, 汝は行為(業)の束縛を断つだろう」(2.39)。「聖なる至尊は言った。この世において二つの立脚地(niṣṭhā)がある。われが前〔の章, N註〕に説いたものである, 罪なき者よ。サーンキヤ論者たちのジュニャーナ・ヨーガ(jñāna-yoga 知による心統一)によるものと, ヨーガ行者のカルマ・ヨーガ(karma-yoga 行為による心統一)によるものである」(3.3)。
- 8) サーンキヤの哲理を背景としたヨーガ行が行為否定の立場にあるということについてはcf.中村(1993: 150-154)。
- 9) 辻(訳)(1982)では, 「汝は〔行作の〕遠離(saṃnyāsa)と実修(yoga=karmayoga)とによりて心統一し(yuktātman)」としている。上村(訳)(1992)では「放擲のヨーガに専心し」とする。
- 10) 厭離者とは, 四住期の中の遊行期にある者を指す場合もある(cf.荻原(編)1979: 「saṃnyāsin」の項)。『マハーバーラタ』第12巻「解脱法品」で遊行者は「供犠の祭火を捨てて」(12.296.37)とあるように, 祭火をもたない者となっている(中村(訳)2000: 674)。しかし, ここでは行為の果報を目的とせず, 祭火を保ち, 自らのなすべき行為を実行する者を厭離者と言っている。単に祭火なき者が厭離者ではないという意味である。
- 11) 「これらの者を討つことを私は望まない。たとえ〔私は〕殺されようとも, マドゥ鬼の討伐者(クリシュナ)よ。たとえ三界の王権のためであろうとも, まして地上のためなら言うまでもない」(1.35)。
- 12) 「欠点ある自己の義務は, 上手く成し遂げられた他人の義務より優れている。本性に定められた行為を実行すれば, 人は罪過を得ることはない」(18.47)。

文献

- 赤松明彦(2008). 『バガヴァッド・ギーター—神に人間の苦悩は理解できるのか?—』東京: 岩波書店.
- 荻原雲来(編)(1979). 『漢訳対照 梵和大辞典』増補改訂版, 東京: 講談社.
- 金倉圓照(1962). 『インド哲学史』京都: 平楽寺書店.
- 金倉圓照(1976). 「インドの倫理—インド倫理思想の変遷—」『インド学仏教学研究Ⅲ インド哲学篇2』東京: 春秋社.
- 上村勝彦(1991). 「『バガヴァッド・ギーター』における放擲のヨーガ(哲学の現場〈特集〉)」『國學院雑誌』, 92(11): 199-215.
- 上村勝彦(訳)(1992). 『バガヴァッド・ギーター』東京: 岩波書店.
- 菊池晃(2006). 「Bhagavadgītāに先行するsaṃnyāsaの用例について」『印度學佛教学研究』, 55(1): 196-199.
- 辻直四郎(訳)(1980). 『バガヴァッド・ギーター』東京: 講談社.
- 辻直四郎(1982). 「バガヴァッド・ギーター—古代インドの宗教詩—」『辻直四郎著作集 第三巻 文学』京都: 法蔵館.

- 中村了昭(1982). 『サーンキヤ哲学の研究—インドの二元論—』東京: 大東出版社.
- 中村了昭(1993). 「叙事詩にあらわれる行為否定の倫理」『宮坂有勝博士古希記念論文集 インド学・密教学研究』, 1: 131-157.
- 中村了昭(1999a). 「バガヴァッド・ギーター総索引(Ⅰ)」『鹿児島経済大学社会学部論集』, 18(2): 59-101.
- 中村了昭(1999b). 「バガヴァッド・ギーター総索引(Ⅱ)」『鹿児島経済大学社会学部論集』, 18(3): 69-92.
- 中村了昭(2000). 「バガヴァッド・ギーター総索引(Ⅲ)」『鹿児島経済大学社会学部論集』, 18(4): 31-53.
- 中村了昭(訳)(2000). 『マハーバーラタの哲学—解脱法品原典解明—(下)』京都: 平楽寺書店.

(ふくだ まきこ: 大学院国際文化研究科 博士後期課程)